

## 医薬品に共通する特性と基本的な知識

### 問 1

医薬品に関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a 医薬品は、人の疾病の診断、治療に使用されること、又は人の身体の構造や機能に影響を及ぼすことを目的とするものであり、疾病の予防に使用されるものはない。
- b 医薬品は、効能効果、用法用量、副作用の必要な情報が適切に伝達されることを通じて、購入者が適切に使用することにより、初めてその役割を十分に発揮する。
- c 医薬品には、市販後にも、医学・薬学等の新たな知見、使用成績等に基づき、その有効性、安全性等の確認が行われる仕組みがある。
- d 医薬品が人体に及ぼす作用については、そのすべてが解明されている。

1 (a、c)    2 (b、c)    3 (b、d)    4 (a、d)

### 問 2

医薬品の副作用に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 副作用は、眠気や口渇等の比較的良好に見られるものから、日常生活に支障を来す程度の健康被害を生じる重大なものまで様々である。
- b 副作用は、医薬品を十分注意して適正に使用した場合でも生じることがある。
- c 副作用は、容易に異変を自覚できるものをいい、直ちに明確な自覚症状として現れないものは、副作用とはいわない。
- d 一般用医薬品の使用により、重大な副作用の兆候が現れたときでも、使用中断による不利益を回避するため、基本的に使用を継続する必要がある。

	a	b	c	d
1	誤	誤	正	正
2	正	誤	誤	正
3	正	正	誤	誤
4	正	正	正	誤
5	誤	正	正	正

問3 一般用医薬品に関する記述のうち、誤っているものはどれか。

- 1 一般の生活者が自ら選択し、使用するものである。
- 2 医療用医薬品と比較して、保健衛生上のリスクが相対的に高い。
- 3 一般用医薬品の適切な使用のため、添付文書や製品表示に、効能効果、用法用量、副作用等の必要な情報が記載されている。
- 4 一般用医薬品の販売に従事する専門家においては、医薬品の有効性、安全性等に関する情報の把握に努める必要がある。

問4

いわゆる健康食品に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a キシリトールを含む特定保健用食品については、「虫歯の原因になりにくい食品です」などの表示が許可されている。
- b 健康食品は、一般用医薬品として販売されている。
- c 健康補助食品（いわゆるサプリメント）の誤った使用方法により、健康被害が生じることがある。
- d 「機能性表示食品」には、疾病に罹患していない者の健康の維持及び増進に役立つ旨又は適する旨（疾病リスクの低減に係るものを除く。）が表示されている。

	a	b	c	d
1	誤	正	正	誤
2	正	正	誤	正
3	正	誤	正	誤
4	誤	正	誤	正
5	正	誤	正	正

問5

医薬品のリスク評価に関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a 動物実験により求められる50%致死量(LD50)は、薬物の毒性の指標として用いられる。
- b 少量の投与であれば、医薬品を長期投与しても慢性的な毒性が発現することはない。
- c Good Vigilance Practice (GVP)とは、医薬品に対する製造販売後の調査及び試験の実施基準のことである。
- d 新規に開発される医薬品のリスク評価として、薬効 - 薬理試験、一般薬理作用試験、毒性試験が厳格に実施されている。

1 (a、b)    2 (b、c)    3 (c、d)    4 (a、d)

問6

アレルギー（過敏反応）に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 普段は医薬品にアレルギーを起こしたことがない人でも、病気等に対する抵抗力が低下している状態では、医薬品がアレルゲンになることがある。
- b 医薬品を使用してアレルギーを起こしたことがある人は、その原因となった医薬品の使用を避ける必要がある。
- c 鶏卵に対するアレルギーがある人は、鶏卵を原材料として作られている医薬品の使用を避けなければならない場合がある。
- d アレルギーには体質的・遺伝的な要素があるため、近い親族にアレルギー体質の人がいる場合には、医薬品の使用の際に注意が必要である。

	a	b	c	d
1	正	正	正	誤
2	正	正	誤	正
3	正	誤	正	正
4	誤	正	正	正
5	正	正	正	正

問7

医薬品の使用に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 医薬品の乱用を繰り返すと、慢性的な臓器障害等を生じるおそれがある。
- b 習慣性・依存性がある成分を含んでいる一般用医薬品は、乱用されることがあるので、必要以上の大量購入や頻回購入などを試みる不審な購入者等には慎重に対処する必要がある。
- c 医薬品の乱用により、一度、薬物依存が形成されても、そこから離脱することは容易である。
- d 定められた用量を超える量を服用するなど、安易に医薬品を使用するような場合には、有害事象につながる危険性が高い。

	a	b	c	d
1	正	正	正	誤
2	正	正	誤	正
3	正	誤	正	正
4	誤	正	正	正
5	正	正	正	正

問8 医薬品とアルコールの相互作用に関する記述について、( )の中に入れるべき字句の正しい組み合わせはどれか。

アルコールは、主として( a )で代謝されるため、酒類(アルコール)をよく摂取する者では、その代謝機能が高まっていることが多い。その結果、代謝によって産生する物質(代謝産物)に薬効があるもの場合には、作用が( b )、代謝産物が人体に悪影響を及ぼす医薬品の場合は副作用が( c )なる。

	a	b	c
1	肝臓	強く出過ぎたり	現れやすく
2	肝臓	弱まったり	現れにくく
3	肝臓	強く出過ぎたり	現れにくく
4	腎臓	強く出過ぎたり	現れやすく
5	腎臓	弱まったり	現れにくく

問9

小児等への医薬品の使用に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 一般用医薬品の使用上の注意において、乳児、幼児という場合には、おおよその目安として、乳児とは1歳未満、幼児とは7歳未満をいう。
- b 小児は、大人と比べて血液脳関門が未発達であるため、医薬品の成分が脳に達しにくい。
- c 乳児向けの用法用量が設定されている一般用医薬品であっても、乳児では基本的には医師の診療を受けることが優先され、一般用医薬品による対処は最小限（夜間等、医師の診療を受けることが困難な場合）にとどめるのが望ましい。
- d 小児は、大人と比べて身体の大きさに対して腸が長く、服用した医薬品の吸収率が相対的に高い。

	a	b	c	d
1	誤	正	正	誤
2	正	正	誤	正
3	正	誤	正	誤
4	誤	正	誤	正
5	正	誤	正	正

問10

高齢者における医薬品の使用に関する記述について、( )の中に入れるべき字句の正しい組み合わせはどれか。

医薬品の使用上の注意においては、おおよその目安として( a )以上を「高齢者」としている。一般に高齢者は生理機能が衰えつつあり、肝臓や腎臓の機能が低下していると医薬品の作用が( b )、若年時と比べて副作用を生じるリスクが( c )なる。

	a	b	c
1	65歳	強く現れやすく	高く
2	65歳	弱くなりやすく	高く
3	65歳	強く現れやすく	低く
4	75歳	弱くなりやすく	低く
5	75歳	強く現れやすく	高く

問 1 1

医薬品等の相互作用に関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a 複数の疾病を有する人では、疾病ごとにそれぞれ医薬品が使用される場合が多く、医薬品同士の相互作用に関して特に注意が必要となる。
- b 複数の医薬品を併用した場合、医薬品の作用が増強することがあるが、減弱することはない。
- c 相互作用は、医薬品が吸収、代謝（体内で化学的に変化すること）、分布又は排出される過程で起こるものと、医薬品が薬理作用をもたらす部位において起こるものがある。
- d 外用薬や注射薬であれば、食品と相互作用を生じることはない。

1 (a、c)    2 (b、c)    3 (b、d)    4 (a、d)

問 1 2

妊婦及び母乳を与える女性（授乳婦）が医薬品を使用する上で注意すべき事項に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 妊婦が一般用医薬品を使用しようとする場合は、一般用医薬品による対処が適当かどうか慎重に検討するべきである。
- b 医薬品の種類によっては、授乳婦が使用した医薬品の成分の一部が、乳汁中に移行することが知られており、母乳を介して乳児が医薬品の成分を摂取することになる場合がある。
- c 妊婦は、体の変調や不調を起こしやすく、妊婦が一般用医薬品を使用した場合の安全性に関する評価は、困難である場合が多い。
- d 一般用医薬品の妊婦の使用については「相談すること」としているものが多い。

a    b    c    d

- 1 正 正 正 誤
- 2 正 正 誤 正
- 3 正 誤 正 正
- 4 誤 正 正 正
- 5 正 正 正 正

問 1 3

プラセボ効果（偽薬効果）に関する記述のうち、誤っているものはどれか。

- 1 医薬品を使用したこと自体による楽観的な結果への期待（暗示効果）が関与して生じると考えられている。
- 2 条件付けによる生体反応が関与して生じると考えられている。
- 3 医薬品を使用したとき、結果的又は偶発的に薬理作用によらない作用を生じることをいう。
- 4 主観的な変化として現れることはあるが、客観的に測定可能な変化として現れることはない。

問 1 4

セルフメディケーション及び一般用医薬品に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 一般用医薬品の販売等に従事する専門家は、購入者等に対して常に科学的な根拠に基づいた正確な情報提供を行い、セルフメディケーションを適切に支援していくことが期待されている。
- b 一般用医薬品の販売等に従事する専門家は、医薬品を使用する人に高熱や激しい腹痛がある場合等、症状が重いときであっても、まずは一般用医薬品を使用するよう勧めることが適切である。
- c 一般用医薬品で対処可能な症状の範囲は、乳幼児や妊婦等、医薬品を使用する人によって変わる場合がある。
- d 一般用医薬品の販売等に従事する専門家においては、情報提供の際に、医薬品の使用によらない対処等を勧めることが適切な場合もある。

	a	b	c	d
1	正	正	正	誤
2	正	正	誤	正
3	正	誤	正	正
4	誤	正	正	正
5	正	正	正	正

問 15

一般用医薬品の品質に関する記述について、正しい組み合わせはどれか。

- a 医薬品は、高温や多湿によって品質の劣化（変質・変敗）を起こしやすいものが多いが、光（紫外線）による劣化は起こさない。
- b 表示されている「使用期限」は、開封の有無にかかわらず製品の品質が保持される期限である。
- c 医薬品は、適切な保管・陳列をすれば、経時変化による品質の劣化を起こさない。
- d 品質が承認された基準に適合しない医薬品、その全部又は一部が変質・変敗した物質から成っている医薬品は販売が禁止されている。

	a	b	c	d
1	正	正	誤	誤
2	誤	正	正	誤
3	誤	誤	正	正
4	誤	誤	誤	正
5	正	誤	誤	誤

問 16

サリドマイドに関する記述のうち、誤っているものはどれか。

- 1 日本では、サリドマイド製剤の催奇形性について、1961年12月に西ドイツ（当時）の企業からの勧告が届いており、かつ翌年になってからもその企業から警告が発せられていたにもかかわらず、出荷停止は1962年5月まで行われず、販売停止及び回収措置も同年9月であるなど、対応の遅さが問題視された。
- 2 サリドマイド訴訟とは、サリドマイド製剤を妊娠している女性が使用したことにより、出生児に四肢欠損、耳の障害等の先天異常（サリドマイド胎芽症）が発生したことに対する損害賠償訴訟である。
- 3 サリドマイドの光学異性体のうち、S体には血管新生を妨げる有害作用がないことから、S体のサリドマイドを分離して製剤化すると催奇性を避けることができる。
- 4 サリドマイドは催眠鎮静成分として承認され、その鎮静作用を目的として、胃腸薬にも配合されていた。

問 17

医薬品の販売等に従事する専門家が購入者から確認しておきたい基本的な事項に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a その医薬品を使用する人が医療機関で治療を受けていないか。
- b その医薬品を使用する人として、小児や高齢者、妊婦等が想定されるか。
- c その医薬品を使用する人が相互作用や飲み合わせで問題を生じるおそれのある他の医薬品や食品を摂取していないか。
- d その医薬品を使用する人が過去にアレルギーや医薬品による副作用等の経験があるか。

	a	b	c	d
1	正	正	正	誤
2	正	正	誤	正
3	正	誤	正	正
4	誤	正	正	正
5	正	正	正	正

問 18

スモン訴訟に関する記述について、( ) の中に入れるべき字句の正しい組み合わせはどれか。

スモン訴訟は、( a ) として販売されていた ( b ) を使用したことにより、( c ) に罹患したことに対する損害賠償訴訟である。スモン訴訟等を契機として、1979年、医薬品の副作用による健康被害の迅速な救済を図るため、医薬品副作用被害救済制度が創設された。

	a	b	c
1	整腸剤	キノホルム製剤	中毒性表皮壊死融解症
2	整腸剤	ペニシリン製剤	亜急性脊髄視神経症
3	解熱鎮痛薬	キノホルム製剤	亜急性脊髄視神経症
4	整腸剤	キノホルム製剤	亜急性脊髄視神経症
5	解熱鎮痛薬	ペニシリン製剤	中毒性表皮壊死融解症

問 19

ヒト免疫不全ウイルス（HIV）及びHIV訴訟に関する記述について、（ ）の中に入れるべき字句の正しい組み合わせはどれか。

HIV訴訟は、（ a ）患者が、HIVが混入した原料（ b ）から製造され（ c ）製剤の投与を受けたことにより、HIVに感染したことに対する損害賠償訴訟である。HIV訴訟の和解後には、製薬企業に対し、従来 of 副作用報告に加えて感染症報告が義務付けられ、また、血液製剤の安全確保対策として、検査や献血時の問診の充実が図られた。

	a	b	c
1	血友病	血漿	グロブリン
2	血友病	血小板	血液凝固因子
3	肝炎	血漿	グロブリン
4	肝炎	血小板	グロブリン
5	血友病	血漿	血液凝固因子

問 20

クロイツフェルト・ヤコブ病（CJD）に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a ヒト乾燥硬膜の原料が、プリオン不活化のための十分な化学的処理が行われないまま製品として流通し、この製品が脳外科手術で移植された患者にCJDが発生した。
- b CJDの症状としては、初期には腹部の膨満感から激しい腹痛を伴う下痢を生じ、次第に下半身の痺れや脱力、歩行困難が現れる。
- c CJD訴訟等を契機として、生物由来製品の安全対策強化、生物由来製品による感染等被害者制度の創設等がなされた。
- d CJDは、ウイルスの一種であるプリオンが原因とされている。

	a	b	c	d
1	誤	正	正	誤
2	正	正	誤	正
3	正	誤	正	誤
4	誤	正	誤	正
5	正	誤	正	正

## 主な医薬品とその作用

### 問 2 1

かぜ（感冒）及びかぜ薬（総合感冒薬）に関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a かぜの約 8 割は、細菌の感染が原因である。
- b かぜとよく似た症状が現れる疾患に、喘息、アレルギー性鼻炎、リウマチ熱、関節リウマチ、肺炎、肺結核、髄膜炎、急性肝炎、尿路感染症等がある。
- c かぜ薬は、細菌やウイルスの増殖を抑えたり、それらを体内から取り除くことにより、咳や発熱などの諸症状の緩和を図るものである。
- d かぜ薬による重篤な副作用として、まれに、ショック（アナフィラキシー）、皮膚粘膜眼症候群、中毒性表皮壊死融解症、喘息、間質性肺炎が起きることがある。

1 (a、c)    2 (b、c)    3 (b、d)    4 (a、d)

### 問 2 2

かぜ薬（総合感冒薬）の配合成分とその成分を配合する目的との関係の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

	(配合成分)	(配合目的)
a	アセトアミノフェン	— 鼻汁分泌を抑える。
b	ブロムヘキシン塩酸塩	— 発熱を鎮め、痛みを和らげる。
c	トラネキサム酸	— 炎症による腫れを和らげる。
d	ジヒドロコデインリン酸塩	— 咳を抑える。

	a	b	c	d
1	誤	誤	正	正
2	正	誤	誤	正
3	正	正	誤	誤
4	正	正	正	誤
5	誤	正	正	正

### 問 2 3

第 1 欄の記述は、かぜ（感冒）の症状緩和に用いられる漢方処方製剤に関するものである。該当する漢方処方製剤は第 2 欄のどれか。

#### 第 1 欄

体力中程度以上のものの感冒の初期（汗をかいていないもの）、鼻かぜ、鼻炎、頭痛、肩こり、筋肉痛、手や肩の痛みに適すとされるが、体の虚弱な人（体力の衰えている人、体の弱い人）、胃腸の弱い人、発汗傾向の著しい人では、悪心、胃部不快感等の副作用が現れやすい等、不向きとされる。

まれに重篤な副作用として肝機能障害、偽アルドステロン症を生じることが知られている。

#### 第 2 欄

- 1 薏苡仁湯
- 2 呉茱萸湯
- 3 小柴胡湯
- 4 小建中湯
- 5 葛根湯

### 問 2 4

解熱鎮痛薬及びその配合成分に関する記述のうち、誤っているものはどれか。

1 解熱鎮痛成分（生薬成分を除く。）による胃腸障害の軽減を目的として、ケイ酸アルミニウム、酸化マグネシウム、水酸化アルミニウムゲル、メタケイ酸アルミン酸マグネシウム等の制酸成分が配合されている場合がある。

2 アスピリン（アスピリンアルミニウムを含む。）は、まれに重篤な副作用として肝機能障害を生じることがある。

3 エテンザミドは、痛みの発生を抑える働きが作用の中心となっている他の解熱鎮痛成分に比べ、痛みが神経を伝わっていくのを抑える働きが強い。

4 イブプロフェンはプロスタグランジンの産生を促進することで消化管粘膜の防御機能を低下させるため、消化管に広範に炎症を生じる疾患である胃・十二指腸潰瘍、潰瘍性大腸炎又はクローン氏病の既往症がある人が使用すると、それら疾患の再発を招くおそれがある。

問 2 5

眠気を促す薬及びその配合成分に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 抗ヒスタミン成分を主薬とする催眠鎮静薬は、慢性的に続く睡眠障害の緩和を目的とした使用に適している。
- b 抑肝散加陳皮半夏は体力中等度をめやすとしてやや消化器が弱いものに幅広く用いることができる。神経がたかぶり、怒りやすい、イライラなどがあるものの神経症、不眠症、小児夜なき、小児疳症、更年期障害、血の道症、歯ぎしりに適すとされる。
- c アリルイソプロピルアセチル尿素は、脳の興奮を抑え、痛覚を鈍くする作用がある。少量でも眠気を催しやすいため、アリルイソプロピルアセチル尿素が配合された医薬品を使用した後は、乗物や危険を伴う機械類の運転操作は避ける必要がある。
- d ジフェンヒドラミン塩酸塩を含有する睡眠改善薬は、15歳未満の小児に対して安心して使用できる。

	a	b	c	d
1	誤	正	正	誤
2	正	正	誤	正
3	正	誤	正	誤
4	誤	正	誤	正
5	正	誤	正	正

問 2 6

カフェインに関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a カフェインは、反復摂取により依存を形成することはない。
- b カフェインには心筋を興奮させる作用があり、副作用として動悸が現れることがある。
- c カフェインには腎臓におけるナトリウムイオン（同時に水分）の再吸収促進作用があり、尿量の減少をもたらす。
- d カフェインには胃液分泌亢進作用があり、その結果、副作用として胃腸障害（食欲不振、悪心・嘔吐）が現れることがあるため、胃酸過多の人や胃潰瘍のある人は、安全使用の観点から留意すべきである。

1 (a、b)    2 (a、c)    3 (b、d)    4 (c、d)

問 27

鎮暈薬（乗物酔い防止薬）及びその配合成分に関する記述のうち、正しいものはどれか。

- 1 鎮暈薬とかぜ薬（総合感冒薬）では、配合成分が重複することはないので、併用に注意する必要はない。
- 2 ジフェニドール塩酸塩は、内耳にある前庭と脳を結ぶ神経（前庭神経）の調節作用のほか、内耳への血流を改善する作用を示す。
- 3 乗物酔いの発現には不安や緊張などの心理的な要因による影響も大きく、それらを和らげることを目的として、鎮静成分のジプロフィリンが配合されている場合がある。
- 4 ピリドキシリン塩酸塩は、乗物酔い防止に用いられている抗コリン成分である。

問 28

1～5で示される鎮咳去痰薬の配合成分のうち、痰の中の粘性タンパク質を溶解・低分子化して粘性を減少させることを主な作用とする成分はどれか。

- 1 メチルエフェドリン塩酸塩
- 2 グリチルリチン酸二カリウム
- 3 ジヒドロコデインリン酸塩
- 4 エチルシステイン塩酸塩
- 5 クロルフェニラミンマレイン酸塩

問 29

咳止めや痰を出しやすくする目的で用いられる漢方処方製剤に関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a 半夏厚朴湯は、構成生薬としてカンゾウを含み、小児喘息、気管支喘息、気管支炎、咳、不安神経症に適すとされる。
- b 麦門冬湯は、水様痰の多い人には不向きとされる。
- c 柴朴湯は、まれに重篤な副作用として間質性肺炎、肝機能障害を生じることが知られている。
- d 五虎湯は、構成生薬としてマオウを含まないため、心臓病、高血圧、糖尿病又は甲状腺機能障害の診断を受けた人の症状を悪化させるおそれはない。

- 1 (a、c)    2 (b、c)    3 (b、d)    4 (a、d)

問30

口腔咽喉薬、うがい薬（含嗽薬）及びそれらの配合成分に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a クロルヘキシジングルコン酸塩が配合された含嗽薬は、口腔内に傷やひどいただれがある人では、強い刺激を生じるおそれがあるため、使用を避ける必要がある。
- b パセドウ病や橋本病などの甲状腺疾患の診断を受けた人では、ヨウ素系殺菌消毒成分が配合された含嗽薬を使用する前に、その使用の適否について、治療を行っている医師等に相談するなどの対応が必要である。
- c ベンゼトニウム塩化物は、喉の粘膜を刺激から保護する目的で配合される。
- d 炎症を生じた粘膜組織の修復を促す作用を期待して、アズレンスルホン酸ナトリウム（水溶性アズレン）が配合されている場合がある。

	a	b	c	d
1	誤	正	正	誤
2	正	誤	正	正
3	誤	正	誤	正
4	正	誤	正	誤
5	正	正	誤	正

問31

胃腸に作用する薬に関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a 消化薬は、炭水化物、脂質、タンパク質等の分解に働く酵素を補う等により、胃や腸の内容物の消化を助けることを目的とする医薬品である。
- b 制酸作用を目的とする成分と健胃作用を目的とする成分は、同時に配合されることはない。
- c 整腸薬には、医薬部外品として製造販売されている製品はない。
- d 制酸成分を主体とする胃腸薬については、酸度の高い食品と一緒に使用すると胃酸に対する中和作用が低下することが考えられるため、炭酸飲料等での服用は適当でない。

- 1 (a、c)    2 (b、c)    3 (b、d)    4 (a、d)

問32

健胃薬に配合される生薬成分及び胃の不調を改善する目的で用いられる漢方処方製剤に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a オウバクは、ミカン科のキハダ又はフェロデンドロン・キネンセの周皮を除いた樹皮を基原とする生薬で、苦味による健胃作用を期待して用いられる。
- b センブリは、リンドウ科のセンブリの開花期の全草を基原とする生薬で、苦味による健胃作用を期待して用いられる。
- c 安中散は、体力中等度以下で腹部筋肉が弛緩する傾向にあり、胃痛又は腹痛があつて、ときに胸やけや、げっぷ、食欲不振、吐きけなどを伴うものの神経性胃炎、慢性胃炎、胃腸虚弱に適するとされる。
- d 六君子湯は、まれに重篤な副作用として、肝機能障害を生じることが知られている。

- |   | a | b | c | d |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 正 | 正 | 正 | 誤 |
| 2 | 正 | 正 | 誤 | 正 |
| 3 | 正 | 誤 | 正 | 正 |
| 4 | 誤 | 正 | 正 | 正 |
| 5 | 正 | 正 | 正 | 正 |

問33

腸の薬の配合成分とその成分を配合する目的との関係の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- |   | (配合成分)        | (配合目的)              |
|---|---------------|---------------------|
| a | ピコスルファートナトリウム | — 小腸を刺激して排便を促す。     |
| b | オウレン          | — 腸粘膜を保護する。         |
| c | 炭酸カルシウム       | — 抗菌作用により下痢の症状を鎮める。 |
| d | ビフィズス菌        | — 腸内細菌のバランスを整える。    |

- |   | a | b | c | d |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 誤 | 正 | 正 | 誤 |
| 2 | 正 | 誤 | 正 | 正 |
| 3 | 誤 | 正 | 誤 | 正 |
| 4 | 正 | 誤 | 正 | 誤 |
| 5 | 正 | 正 | 誤 | 正 |

### 問 3 4

第 1 欄の記述は、腸の不調を改善する目的で用いられ、構成生薬としてカンゾウを含む漢方処方製剤に関するものである。該当する漢方処方製剤は第 2 欄のどれか。

#### 第 1 欄

体力に関わらず広く応用され、便秘、便秘に伴う頭重、のぼせ、湿疹・皮膚炎、ふきでもの（にきび）、食欲不振（食欲減退）、腹部膨満、腸内異常発酵、痔などの症状の緩和に適すとされるが、体の虚弱な人（体力の衰えている人、体の弱い人）、胃腸が弱く下痢しやすい人では、激しい腹痛を伴う下痢等の副作用が現れやすい等、不向きとされる。また、本剤を使用している間は、他の瀉下薬の使用を避ける必要がある。

#### 第 2 欄

- 1 大黃甘草湯
- 2 桂枝加芍薬湯
- 3 七物降下湯
- 4 白虎加人参湯
- 5 平胃散

### 問 3 5

胃腸鎮痛鎮痙薬に配合される成分に関する記述のうち、誤っているものはどれか。

- 1 抗コリン成分であるメチルベナクチジウム臭化物の副交感神経系の働きを抑える作用は消化管に限定されないため、散瞳による目のかすみや異常な眩しさ、顔のほてり、頭痛、眠気、口渇、便秘、排尿困難等の副作用が現れることがある。
- 2 パパペリン塩酸塩は、消化管の平滑筋に直接働いて胃腸の痙攣を鎮める作用を示すが、抗コリン成分と異なり、眼圧を上昇させる作用がないため、緑内障の症状の悪化を招くおそれはない。
- 3 鎮痛鎮痙作用を期待して、エンゴサク（ケシ科のエンゴサクの塊茎）、シャクヤクが配合されている場合がある。
- 4 消化管の粘膜及び平滑筋に対する作用による鎮痛鎮痙の効果を期待して、アミノ安息香酸エチルが配合されている場合がある。

問36

強心薬及びその配合成分に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 一般に、強心薬を5～6日間使用して症状の改善がみられない場合には、心臓以外の要因、例えば、呼吸器疾患、貧血、高血圧症、甲状腺機能の異常等のほか、精神神経系の疾患も考えられる。
- b 強心薬には、心筋を弛緩させる成分が主体として配合されている。
- c センソは、有効域が比較的狭い成分であり、1日用量中センソ5mgを超えて含有する医薬品は劇薬に指定されている。
- d ジャコウは、強心薬のほか、小児五疳薬にも配合されている場合がある。

	a	b	c	d
1	誤	正	正	誤
2	正	正	誤	正
3	正	誤	正	誤
4	誤	正	誤	正
5	正	誤	正	正

問37

浣腸薬に関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a 浣腸薬は、繰り返し使用しても直腸の感受性の低下（いわゆる慣れ）が生じないため効果が弱くなることはない。
- b 便秘については、便秘になりやすい食生活等の生活習慣の改善が図られることが重要であり、浣腸薬の使用は一時的なものにとどめるべきである。
- c グリセリンが配合された浣腸薬では、排便時に血圧低下を生じて、立ちくらみの症状が現れるとの報告があり、そうした症状は体力の衰えている高齢者や心臓に基礎疾患がある人で特に現れやすい。
- d 坐剤を挿入した後は、すぐに排便を試みる必要がある。

- 1 (a、c)    2 (b、c)    3 (b、d)    4 (a、d)

問38

高コレステロール改善薬及びその配合成分に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 生活習慣の改善を図りつつ、しばらくの間（1～3か月）、高コレステロール改善薬の使用を続けてもなお、検査値に改善がみられない時には、遺伝的又は内分泌的要因も疑われるため、いったん使用を中止して医師の診療を受けるなどの対応が必要である。
- b 大豆油不飽和脂肪酸（ソイステロール）には、腸管におけるコレステロールの吸収を抑える働きがあるとされる。
- c ビタミンEは、コレステロールからの過酸化脂質の生成を抑えるほか、末梢血管における血行を促進する作用があるとされ、血中コレステロール異常に伴う末梢血行障害（手足の冷え、痺れ）の緩和等を目的として用いられる。
- d 高コレステロール改善薬は、ウエスト周囲径（腹囲）を減少させるなどの痩身効果を目的とした医薬品である。

	a	b	c	d
1	誤	誤	正	正
2	正	誤	誤	正
3	正	正	誤	誤
4	正	正	正	誤
5	誤	正	正	正

問39

貧血症状及び貧血用薬（鉄製剤）に関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a 鉄分の摂取不足を生じると、初期段階からヘモグロビン量が減少するため、ただちに動悸、息切れ等の貧血の症状が現れる。
- b 鉄欠乏性貧血を予防するため、貧血の症状がみられる以前から継続的に鉄製剤を使用することが適当である。
- c 鉄製剤を服用すると便が黒くなることがある。これは使用の中止を要する副作用等の異常ではないが、服用前から便が黒い場合は貧血の原因として消化管内で出血している場合もあるため、服用前の便の状況との対比が必要である。
- d 鉄製剤の主な副作用として、悪心（吐きけ）、嘔吐、食欲不振、胃部不快感、腹痛、便秘、下痢等の胃腸障害が知られている。

1	(a、b)	2	(a、c)	3	(b、d)	4	(c、d)
---	-------	---	-------	---	-------	---	-------

問40

循環器用薬及びその配合成分に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a ルチンは、ビタミン様物質の一種で、高血圧等における毛細血管の補強、強化の効果を期待して用いられる。
- b ヘプロニカートは、末梢の血液循環を改善する作用を示し、ビタミンEと組み合わせて用いられる場合が多い。
- c 高血圧や心疾患に伴う諸症状を改善する一般用医薬品は、体質の改善又は症状の緩和を目的とするものではなく、高血圧や心疾患そのものの治療を目的とするものである。
- d 三黄瀉心湯は、構成生薬としてダイオウが含まれていないので、瀉下薬の併用に留意する 必要がない。

	a	b	c	d
1	正	正	誤	誤
2	誤	正	正	誤
3	誤	誤	正	正
4	誤	誤	誤	正
5	正	誤	誤	誤

問41

痔及び痔疾用薬に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 裂肛は、肛門に存在する細かい血管群が部分的に拡張し、肛門内にいぼ状の腫れが生じたもので、出血や痛みを生じる。
- b 痔は、肛門部に過度の負担をかけることやストレス等により生じる生活習慣病である。
- c 内用痔疾用薬には、止血効果を期待してカルバゾクロムが配合されている場合がある。
- d 痔の悪化等により細菌感染が起きると、異なる種類の細菌の混合感染が起こり、膿瘍や痔瘻を生じ、その周囲の組織に重大なダメージをもたらすことがある。

	a	b	c	d
1	誤	誤	正	正
2	正	誤	誤	正
3	正	正	誤	誤
4	正	正	正	誤
5	誤	正	正	正

#### 問 4 2

第 1 欄の記述は、泌尿器用薬として用いられる漢方処方製剤に関するものである。該当する漢方処方製剤は第 2 欄のどれか。

##### 第 1 欄

体力中等度以下で、疲れやすくて、四肢が冷えやすく尿量減少し、むくみがあり、ときに口渇があるもの下肢痛、腰痛、しびれ、高齢者のかすみ目、痒み、排尿困難、頻尿、むくみ、高血圧に伴う随伴症状の改善（肩こり、頭重、耳鳴り）に適すとされるが、胃腸が弱く下痢しやすい人、のぼせが強く赤ら顔で体力の充実している人では、胃部不快感、腹痛、のぼせ、動悸等の副作用が現れやすい等、不向きとされる。

##### 第 2 欄

- 1 牛車腎気丸
- 2 猪苓湯
- 3 当帰芍薬散
- 4 葛根湯加川芎辛夷
- 5 十味敗毒湯

#### 問 4 3

婦人薬及び月経等に関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a 月経前症候群は、月経の約 10～3 日前に現れ、月経開始と共に消失する腹部膨満感、頭痛、乳房痛などの身体症状が現れるが、精神症状は現れない。
- b 閉経の前後には、更年期（閉経周辺期）と呼ばれる移行的な時期があり、体内の女性ホルモンの量が大きく変動することがある。
- c 月経周期は、種々のホルモンの複雑な相互作用によって調節されており、視床下部や下垂体で産生されるホルモンと、卵巣で産生される女性ホルモンが関与する。
- d 人工的に合成された女性ホルモンの一種であるエチニルエストラジオールは、腔粘膜に適用されるものがあるが、この場合、女性ホルモン成分は、循環血液中に移行することはない。

- 1 (a、b)    2 (b、c)    3 (c、d)    4 (a、d)

問 4 4

鼻炎用内服薬に配合される成分に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

a プソイドエフェドリン塩酸塩は、鼻粘膜の充血や腫れを和らげることを目的として配合されている場合がある。

b ジフェンヒドラミン塩酸塩等のジフェンヒドラミンを含む成分については、吸収されたジフェンヒドラミンの一部が乳汁に移行して乳児に昏睡を生じるおそれがあるため、母乳を与える女性は使用を避けるか、使用する場合には授乳を避ける必要がある。

c 排尿困難の症状がある人、緑内障の診断を受けた人では、クレマスチンフマル酸塩が配合された内服薬の服用により、症状の悪化を招くおそれがあるため、使用する前にその適否につき、治療を行っている医師又は処方薬の調剤を行った薬剤師に相談がなされるべきである。

d ケイガイは、シソ科のケイガイの花穂を基原とする生薬で、発汗、解熱、鎮痛等の作用を有するとされ、鼻閉への効果を期待して用いられる。

	a	b	c	d
1	正	正	正	誤
2	正	正	誤	正
3	正	誤	正	正
4	誤	正	正	正
5	正	正	正	正

問 4 5

鼻炎及び鼻に用いる薬の配合成分に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a リドカイン塩酸塩は、鼻粘膜の過敏性や痛みや痒みを抑えることを目的として配合されている場合がある。
- b アレルギー性鼻炎は、鼻腔内に付着したウイルスや細菌が原因となって生じる鼻粘膜の炎症で、かぜの随伴症状として現れることが多い。
- c 鼻粘膜が腫れてポリープ（鼻茸）となっている場合には、一般用医薬品を長期間使用することにより、回復が期待できるため、医療機関を受診する必要がない。
- d かぜ症候群に伴う鼻炎症状の場合、鼻炎が続くことで副鼻腔炎や中耳炎などにつながることもある。

	a	b	c	d
1	誤	誤	正	正
2	正	誤	誤	正
3	正	正	誤	誤
4	正	正	正	誤
5	誤	正	正	正

問 4 6

眼科用薬に配合される成分に関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a コンドロイチン硫酸ナトリウムは、結膜や角膜の乾燥を防ぐことを目的として用いられる。
- b スルファメトキサゾールは、細菌に対して効果はないが、ウイルスや真菌の感染に対する効果はある。
- c クロモグリク酸ナトリウムは、肥満細胞からのヒスタミン遊離を促進する作用を示す。
- d プラノプロフェンは、炎症の原因となる物質の生成を抑える作用を示し、目の炎症を改善する効果を期待して用いられる。

1 (a、c)    2 (b、c)    3 (b、d)    4 (a、d)

問 4 7

外皮用薬及びその配合成分に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 非ステロイド性抗炎症成分であるインドメタシンは、殺菌作用があるため、皮膚感染症に用いられる。
- b スプレー剤は、強い刺激を生じるおそれがあるため、目の周囲や粘膜（口唇等）への使用は避けることとされている。
- c カプサイシンは、皮膚表面に冷感刺激を与え、軽い炎症を起こして反射的に血管を拡張させることで患部の血行を促す効果を期待して用いられる。
- d 貼付剤は、同じ部位に連続して貼付けると、かぶれ等を生じやすくなる。

	a	b	c	d
1	誤	正	正	誤
2	正	正	誤	正
3	正	誤	正	誤
4	誤	正	誤	正
5	正	誤	正	正

問 4 8

みずむし・たむし等の治療及びその治療に用いる薬に関する記述のうち、正しいものはどれか。

- 1 シクロピロクスオラミンは、イミダゾール系抗真菌成分のひとつで、皮膚糸状菌の細胞膜を構成する成分の産生を妨げたり、細胞膜の透過性を変化させることにより、その増殖を抑える。
- 2 湿疹か皮膚糸状菌による皮膚感染かはっきりしない場合、抗真菌成分が配合された一般用医薬品を使用することが望ましい。
- 3 一般的に、液剤は有効成分の浸透性が高く、皮膚が厚く角質化している部分に適している。
- 4 みずむしやたむしに対する基本的なケアと併せて、みずむし・たむし用薬を2週間位使用しても症状が良くならない場合には、自己の判断により別の抗真菌成分が配合された一般用医薬品に切り換えて使用することが望ましい。

問 4 9

口内炎及び口内炎用薬の配合成分に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 口内炎は、口腔粘膜に生じる炎症で、口腔の粘膜上皮に水疱や潰瘍ができて痛み、ときに口臭を伴う。
- b 一般用医薬品の副作用として口内炎を生じることはない。
- c 口内炎は、通常であれば1～2週間で自然寛解するが、一度に複数箇所に発生して食事に著しい支障を来すほどの状態であれば、医療機関を受診するなどの対応が必要である。
- d 口腔粘膜の炎症を和らげることを目的として、グリチルレチン酸が配合されている場合がある。

	a	b	c	d
1	誤	正	正	誤
2	正	誤	正	正
3	誤	正	誤	正
4	正	誤	正	誤
5	正	正	誤	正

問50

一般用医薬品の禁煙補助剤のうち咀嚼剤に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 菓子のガムのように噛むことで唾液が多く分泌され、ニコチンが唾液とともに飲み込まれてしまい、吐きけや腹痛等の副作用が現れやすくなるため、ゆっくりと断続的に噛むこととされている。
- b コーヒーや炭酸飲料など口腔内を酸性にする食品を摂取した後、しばらくは使用を避けることとされている。
- c 妊婦又は妊娠していると思われる女性であっても、使用を避ける必要はない。
- d 喫煙を完全に止めたうえで使用することとされており、特に、使用中又は使用直後の喫煙は避ける必要がある。

	a	b	c	d
1	誤	正	正	誤
2	正	誤	正	正
3	誤	正	誤	正
4	正	誤	正	誤
5	正	正	誤	正

問51

歯痛・歯槽膿漏薬に関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a 歯槽膿漏薬は、歯肉炎、歯槽膿漏の諸症状（歯肉からの出血や膿、歯肉の腫れ、むずがゆさ、口臭、口腔内の粘り等）の緩和を目的とする医薬品である。
- b 歯痛薬は、歯の齲蝕（むし歯）による歯痛を応急的に鎮め、歯の齲蝕が修復されるのを促す医薬品である。
- c アラントインは、炎症を起こした歯周組織の修復を促す作用を期待して配合されている場合がある。
- d 内服で用いる歯槽膿漏薬と、同じ又は同種の有効成分が配合された胃腸薬を併用した場合でも、副作用が現れやすくなるおそれはない。

- 1 (a、c)    2 (b、c)    3 (b、d)    4 (a、d)

問52

ビタミン成分に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a ビタミンCは、タンパク質の代謝に関与し、皮膚や粘膜の健康維持、神経機能の維持に重要な栄養素である。
- b ビタミンDは、腸管でのカルシウム吸収及び尿細管でのカルシウム再吸収を促して、骨の形成を助ける栄養素である。
- c ビタミンEは、夜間視力を維持したり、皮膚や粘膜の機能を正常に保つために重要な栄養素である。
- d ビタミンB1は、炭水化物からのエネルギー産生に不可欠な栄養素で、神経の正常な働きを維持する作用がある。

	a	b	c	d
1	正	誤	誤	正
2	誤	誤	正	誤
3	誤	正	誤	正
4	正	誤	正	誤
5	誤	正	誤	誤

問53

1～5で示されるビタミン主薬製剤の配合成分のうち、妊娠3か月以内の妊婦、妊娠していると思われる女性及び妊娠を希望する女性が特に過剰摂取に留意する必要があるものはどれか。

- 1 フルスルチアミン塩酸塩
- 2 レチノール酢酸エステル
- 3 ヒドロキシコバラミン塩酸塩
- 4 ピリドキサルリン酸エステル
- 5 フラビンアデニンジヌクレオチドナトリウム

問54

滋養強壯保健薬及びその配合成分に関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a 十全大補湯は、体力虚弱で元気がなく、胃腸の働きが衰えて、疲れやすいものの虚弱体質、疲労倦怠、病後・術後の衰弱、食欲不振、寝汗、感冒に適すとされ、まれに重篤な副作用として、間質性肺炎、肝機能障害を生じることが知られている。
- b システインは、髪や爪、肌などに存在するアミノ酸の一種で、皮膚におけるメラニンの生成を抑えるとともに、皮膚の新陳代謝を活発にしてメラニンの排出を促す働きがあるとされる。
- c アミノエチルスルホン酸（タウリン）は、筋肉や脳、心臓、目、神経等、体のあらゆる部分に存在し、肝臓機能を改善する働きがあるとされる。
- d グルクロノラクトンは、米油及び米胚芽油から見出された抗酸化作用を示す成分で、ビタミンE等と組み合わせて配合されている場合がある。

1 (a、b)    2 (b、c)    3 (c、d)    4 (a、d)

問55

漢方及び漢方処方製剤等に関する記述のうち、誤っているものはどれか。

- 1 漢方の病態認識には、虚実、陰陽、気血水、五臓などがある。
- 2 漢方処方製剤は、用法用量において適用年齢の下限が設けられていない場合であっても、生後3か月未満の乳児には使用しないこととされている。
- 3 現代中国で利用されている中医学に基づく薬剤は、中薬と呼ばれる。
- 4 生薬製剤は、生薬成分を組み合わせることで配合された医薬品で、漢方処方製剤と同様に、使用する人の体質や症状その他の状態に適した配合を選択するという考え方に基づくものである。

問56

生薬成分に関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a オウゴンは、シソ科のコガネバナの周皮を除いた根を基原とする生薬であり、主に抗炎症作用を期待して用いられる。
- b ポウフウは、マメ科のクズの周皮を除いた根を基原とする生薬であり、解熱、鎮痙等の作用を期待して用いられる。
- c ブクリョウは、サルノコシカケ科のマツホドの菌核で、通例、外層をほとんど除いたものを基原とする生薬であり、利尿、健胃、鎮静等の作用を期待して用いられる。
- d サイコは、キンポウゲ科のハナトリカブト又はオクトリカブトの塊根を減毒加工して製したものを基原とする生薬であり、心筋の収縮力を高めて血液循環を改善する作用を持つ。

1 (a、c)    2 (b、c)    3 (b、d)    4 (a、d)

問57

消毒薬及びその配合成分に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 殺菌・消毒は、生存する微生物の数を減らすために行われる処置であり、また滅菌は物質中のすべての微生物を殺滅又は除去することである。
- b 次亜塩素酸ナトリウムは、強い還元力により一般細菌類、真菌類、ウイルス全般に対する殺菌消毒作用を示す。
- c 消毒薬が誤って皮膚に付着した場合は、流水をかけながら着衣を取り、石鹼を用いて流水で皮膚を十分に（15分間以上）水洗する。
- d クレゾール石鹼液は結核菌を含む一般細菌類、真菌類、ウイルス全般に対する殺菌消毒作用を示す。

	a	b	c	d
1	正	誤	誤	正
2	誤	誤	正	誤
3	誤	正	誤	正
4	正	誤	正	誤
5	誤	正	誤	誤

問 5 8

第 1 欄の記述は、衛生害虫の防除を目的とする殺虫剤の成分に関するものである。第 1 欄の作用機序を示す成分は第 2 欄のどれか。

第 1 欄

殺虫作用は、アセチルコリンを分解する酵素（アセチルコリンエステラーゼ）と不可逆的に結合してその働きを阻害することによる。この殺虫成分は、ほ乳類や鳥類では速やかに分解されて排泄されるため毒性は比較的低い。ただし、高濃度又は多量に曝露した場合（特に、誤って飲み込んでしまった場合）には、神経の異常な興奮が起こり、縮瞳、呼吸困難、筋肉麻痺等の症状が現れるおそれがある。

第 2 欄

- 1 フタルスリン
- 2 フェニトロチオン
- 3 プロポクスル
- 4 ディート
- 5 オルトジクロロベンゼン

問 5 9

衛生害虫と殺虫剤・忌避剤及びその配合成分に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 燻蒸処理は、ゴキブリの卵に対して殺虫効果を示さない。
- b シラムの防除には、殺虫成分としてフェノトリンが配合されたシャンプーやてんか粉が用いられる。
- c ハエの防除の基本は、ウジの防除であり、ウジの防除法としては、通常、有機リン系殺虫成分が配合された殺虫剤が用いられる。
- d ツツガムシは、ヒトへの吸血によって皮膚に発疹や痒みを引き起こすほか、日本脳炎、マラリア、黄熱、デング熱等の重篤な病気を媒介する。

- |   | a | b | c | d |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 正 | 正 | 正 | 誤 |
| 2 | 正 | 正 | 誤 | 正 |
| 3 | 正 | 誤 | 正 | 正 |
| 4 | 誤 | 正 | 正 | 正 |
| 5 | 正 | 正 | 正 | 正 |

問 6 0

一般用検査薬等に関する記述のうち、誤っているものはどれか。

- 1 尿糖の検査薬は、尿中の糖の有無を調べるものであり、その結果をもって直ちに疾患の有無や種類を判断することはできない。
- 2 経口避妊薬や更年期障害治療薬などのホルモン剤を使用している人では、妊娠していなくても尿中ヒト絨毛性性腺刺激ホルモン（hCG）が検出されることがある。
- 3 尿中hCGの検出反応は、hCGと特異的に反応する抗体や酵素を用いた反応であるため、温度の影響を受けない。
- 4 尿中のタンパク値に異常を生じる要因については、腎臓機能障害によるものとして腎炎やネフローゼ、尿路に異常が生じたことによるものとして尿路感染症、尿路結石、膀胱炎等がある。